



小池 光選

C56の汽笛を遠く聴きながら眠りについた昭和懐かし 東久留米市 郷間 浩明

【評】懐かしき蒸気機関車。夜の列車は貨物列車か。その汽笛を聴きながら眠りについた。エアコンなどどこにもなかった。それでも安らかに眠れた日々よ。

妹泣けば親より早く駆けつけて二歳の幼トントンあやす 津山市 柴田真由美

【評】赤ちゃんが生まれたお姉ちゃん。二歳だけど、妹泣けば親より早く駆けつけてあやす。なんとかわいらしいことよ。大きくなったらきつと仲良しの姉妹になる。

「お父さん小さな葬儀でいいの？」と娘が問ふから「さんせい」と云ふ 城陽市 相原 洋次

【評】ごく深刻な会話なのだが、とても明るい感じがするところがよい。問われて「さんせい」と答える。この返事にも味がある。

我が友は「みーちゃん」と猫の名呼ぶように老子今なお我が名を呼べり 小山市 松本 道子

母宛ての軍事郵便出て来たる兵役八年父の青春 龍ヶ崎市 前田のぶ子

戦時中父母つけくれし我が名前重き願ひをしみじみ思ふ 大阪市 上平 幸恵

胸のすく逆転打を狙っていたが点差は開くばかりで晩年 横浜市 森 秀人

お弁当買いに行く道ひまわりが咲いていました 心和むね 鳴門市 楠井 花乃

門前の凌霄の花盛りなりわたしは九十七歳となる 小美玉市 松山 光

いつもより水圧高くシャワー浴ぶ「本能寺の変」観終へし夜は 岡山市 岩藤由美子

栗木 京子選

母の作るカルピスいつも薄かった今頃やつと自販機で知る 大東市 若槻 豊彦

【評】私なども、カルピスの濃縮液を冷水で薄めて飲んだ世代。たしかに作る人によって濃度が変わった。お客さんに出すときは濃い味にしたり。上旬の具体に共感を覚えた。

電車には間に合ったけどまざまざと小走りできぬ衰えを知り 大津市 山下びわこ

【評】余裕で間に合うと思ったのに、ぎりぎりであった。足は震えるし、息苦しさは治まらない。体力の衰えを突き付けられてしまった。「まざまざと」に実感がにじむ。

シール帳広げたまま少年は車窓に迫る海に見とれる 奈良県 藤本 京子

【評】シール帳に夢中になっている子。いまどきの少年らしい姿である。そんな彼の心を一気に奪った「海」。下句が爽快である。

朝夕はこの部屋屋はあの部屋と涼を探してノートパソコン 郡山市 寺田 秀雄

その昔祖母が「きつい」と言っていた土佐の日射しが今全国に 大阪府 木村由里亜

酷暑日に負けじと次々毛布出し洗って干して太陽と競う 泉佐野市 河合 陽子

仏壇のメロン切る日を日延べして帰省の子等の日にちに合致す 新居浜市 寺村 洋子

「購入は一人二点」と貼り紙のごみ袋にもホルムズの余波 埼玉県 鈴木えみ子

千羽鶴病む身を起こし願い込め七〇六の数で止めて吊るす 美濃加茂市 近藤 祐司

大木に掛けた上衣のポケットに蝙蝠の子のいた日の記憶 大和市 二界友理子